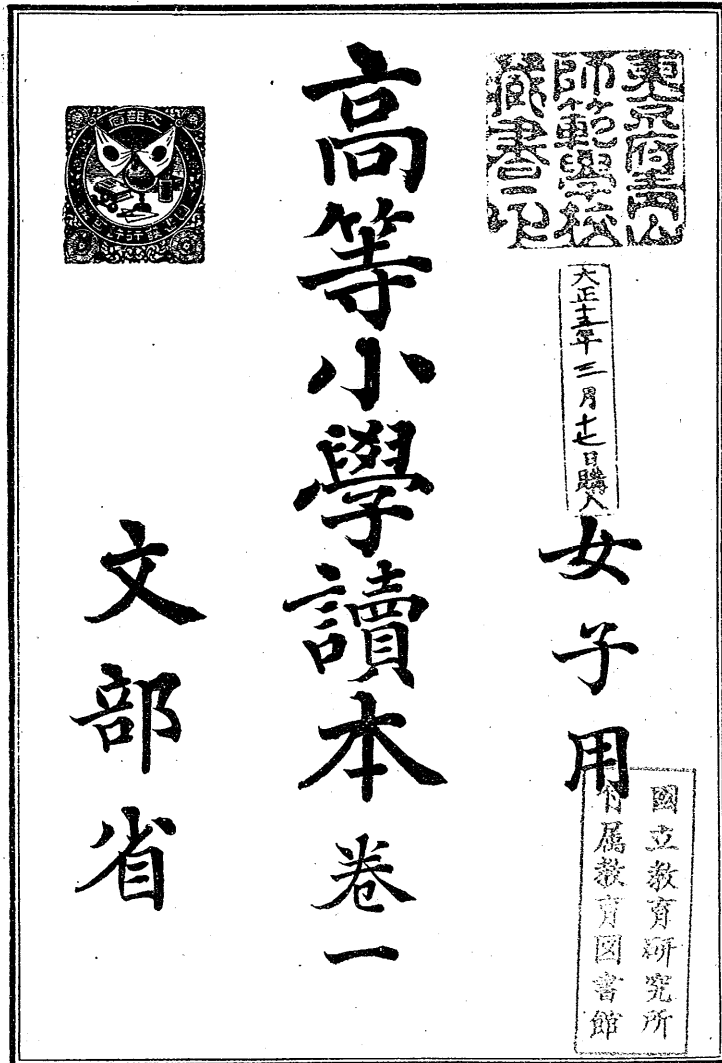


D3

240



高等小學讀本卷一

文部省



東京商工師範學校蔵書印

大正五年二月七日購入

女子用

國立教育研究所
附屬教育圖書館

目 録

第一課 昭憲皇太后御歌	一	第十六課 臺所の整理	六十
第二課 太田道灌	四	第十七課 マヂソン夫人	六十四
第三課 ボチ	八	第十八課 かげぐち	六十七
第四課 詩かぬ種は生えぬ	十二	第十九課 南洋の珍果	七十四
第五課 盤珪禪師	十六	第二十課 綱引	八十
第六課 祖母の物語	十八	第二十一課 嫁げる姉の許へ	八十三
第七課 洞庭湖	二十四	第二十二課 漁船歸る	八十五
第八課 契約	二十八	第二十三課 かぶと蟲	九十
第九課 山村	三十二	第二十四課 スバルタ武士	九十五
第十課 書物の購入を頼む	三十九	第二十五課 統計	百一
第十一課 笑話	四十一	第二十六課 筏流し	百八
第十二課 春日局	四十二	第二十七課 瀧澤馬琴の苦心	百十四
第十三課 眞の知己	四十九	第二十八課 やまあらし	百十九
第十四課 廢物の利用	五十三	第二十九課 足柄山	百二十四
第十五課 海の朝	五十八	第三十課 故郷	百二十五

高等小學讀本 女子用卷一

第一課 昭憲皇太后御歌

人知れず思ふ心のよしあしも

照らし分くらん天地の神

怠りて磨かざりせば光ある

玉も瓦にひとしからまし

日の本のさかひ離れてゆく船に

國の光も載せてやらまし

持つ人の心によりてたからとも

あたともなるは黄金なりけり

神風の伊勢の内外の宮柱

ゆるぎなき世をなほ祈るかな

朝毎にむかふ鏡のくもりなく

あらまほしきは心なりけり

なごりなく霞ははれて朝ひばり

あがるかぎりも見ゆる空かな

夏草の茂みが中にまじれども

なほしな高し姫百合の花

柿の實の色づく軒に霧たちて

めじろ鳴くなり秋の山里

あかつきの雲吹拂ふ木枯に

かゞやく星の影のさやけさ

第二課 太田道灌

古の眞の武士は文武二道に心掛けたり。されば戦國爭亂の世にも、風流のたしなみありし人少からず。太田道灌の如きも其の一人なり。道灌は初め左衛門大夫持資といひ、上杉定正の家臣なり。幼時より氣力盛にして人に屈せず、武道を好み、未恐しき少年よと、はさせられぬ。壯年の頃鷹狩に出で、雨にあひてとある民家に入り、雨具を借らんとするに、少女出て來りて、一言の答もなく、山吹の花一枝を差出す。持資其の意を解せずして歸りしが、後或人の語りて、それは

高讀女一

高讀女一

七重八重

花は咲けども

やまぶきの

みの一つだに

無きぞ悲しき

といふ古歌の心なるべし

といふを聞きて、始

めて身の無學を恥ぢ、そ

れより文學に心を寄せ

たりとぞ。

後武藏國江戸の地に城を



築き、城内に文庫を設け、史籍歌集醫書兵書等數千卷を
をさめ、暇あれば書を讀み歌を詠じたりといふ。かつて
將軍義政に見えんとて京に上りし時、後土御門天皇勅
して武藏野の様を問はせ給ふ。道灌歌を以て答へ奉る。

露おかぬ方もありけり夕立の

空よりひろき武藏野の原

又隅田川の都鳥はと問はせ給ふに、

年ふれどわがまだ知らぬ都鳥

隅田川原に宿はあれども

さらば汝が館の風景はとありしに、

我がいほは松原つゞき海近く

高讀女一
高讀女一

富士の高根を軒端にぞ見る

と答へ申ししかば、叡感淺からず、御製を下し給ふ。

武藏野はかるかやのみと思ひしに

かゝることばの花や咲くらん、

或時の戰に、定正に従ひて夜海岸を通りしに、定正潮の
満干を知らず。道灌いふ、潮干たり、たやすく進むべしと。
定正其の故を問へば、道灌

遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴く音に潮の満干をぞ知る

といふ古歌ありと答へたり。

道灌の築きし江戸城は、後徳川氏之を修築して、歴代將

軍の居城とし、當時の松原つゞきの寒村は、何時しか繁華なる江戸の都會となれり。星霜四百年、明治の大御世に宮城を此處に定め給へるは、道灌の名譽此の上なしとやいはん。

第三課 ポチ

僕は元來動物好きで、とりわけ犬は大好きだ。犬好きは犬が知る。犬ぎらひの父が呼んでも、ポチはほんのちよつとお愛想に尾を振るばかりで、振向きもない。母が呼ぶと、ふだん食事の世話になる人だから、又何かもらへるかと思つて、目をかゞやかしてとんで来る。さうして母の手中にそれらしい物があれば、兎うさぎのや

うにはねて喜ぶが、唯それだけの事で、其の時のポチはやはり犬に違ひない。

其の犬に違ひないポチが僕に向ふと、犬でなくなる、それとも僕が人間でなくなるのか、とにかく僕とポチの間には人畜の差別が無くなつてしまふ。

ポチは朝起だから、僕が起きる時分にはもう一しきり遊んだところだが、僕の聲を聞きつけると、何處に居ても一もくさんにとんで来る。僕もにこくして急いで庭へ下りると、ポチはすかさず泥足どろあしで飛びつく。僕はうれしくて抱上げてやる。ポチは抱かれながら大あばれにあばれる。父や母が顔をしかめて、きたないくとい

ふ。なるほど考へてみればきたないやうではあるけれども……。

ポチもやつとこれで氣がすんだといふ形で、また庭先をうろくし出して、縁の下などをのぞいてみると、其處にわらぢ蟲の一ぱいたかつた古ざうりか何かがある。好い物を見つけたと言ひさうな顔をして、それをくはへ出して來て、首を一つ振ると、ざうりは横飛にぼんと飛ぶ。すかさず追つかけて行つて、又くはへてぼんとはふる。そんなたわいもない事をして元氣よく遊ぶ。

其のひまに僕は顔を洗ふ、飯を食ふ。それがすむと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で僕

の一番苦しい時だ。ポチが後を追ふ。うつかり出ようものなら、何處までもくついて來て、追つたつてどうしたつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つてゐて、其の時分になると、何時の間にか玄關^{げんかん}先へ廻つて待つてゐる。仕方がないから、しまひにはつかまへて、いやおうなしに格子^{かき}戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐるが、さうすると前足で格子をひつかいて、悲しい鳴き聲を立てて後をしたひ、僕の姿が見えなくなつても鳴き止まない。僕も同じ思ふだ。泣出しさうな顔をして、ばた／＼とかけ出し、聲の聞えない處まで來て、やうやくほつとして、なみの足どり

になる。(長谷川辰之助「平凡」據る)

第四課 蒔かぬ種は生えぬ

「蒔かぬ種は生えぬ」といふ諺は、誰でも知つてゐることであるが、生物界の現象中には、ともすると蒔かぬ種が生えるやうな考を起させることがある。それで今でも世間には、往々のみがわくとか、しらみがわくとか言つてゐる人がある。もつともかういふ考は我が國ばかりでなく、何處の國にもあつたのであるが、二三百年以前から追ひく、實物に就いて物を研究する風が起り、又顯微鏡を用ひて細かい物を調べることが出来るやうになつた結果だんく、其の誤であることがわかつて

來た。例へば昔は、うじといふものは、肉などが腐ると自然に其處にわくものであると信じてゐた。ところがイタリヤのレヂといふ學者が、細かい金網で肉をおほつてはへが附かないやうにして置いたところが、幾日過ぎても、どんなに肉が腐つても、うじが一ぴきも生じなかつた。そこでうじは決して腐つた肉からわくものではなく、全くはへが來て産みつけた卵が孵つたのであるといふことが確になつた。かうして實物に就いてだんだん研究してみると、元は自然にわくと思はれてゐた蛔蟲、やさなだ蟲も、種なしに生ずるものではないといふことがわかつて來た。

又山間に新しく掘つた池などに、鰻が居たり、しぐみが居たりすることがある。ちよつと考へると、鰻やしぐみがかういふ池に居るやうになるのは、全く其の場所にわいたとしか思はれない。しかしよく調べてみると、やはりわいたのではなく、外から來たのである。鰻は元來海中で孵るもので、初は透明な白魚のやうなものであるが、だんく體がしまり、色も次第に黒くなつて、いはゆる針鰻になる。此の針鰻は幾千も幾萬も群をなして川をさかのぼり、次第に細い溝などへ進み、雨でも降れば、路上や草の間の水たまりを傳はつて、何處までも進んで行く性質を持つてゐる。であるから鰻は山間の新

高麗女一

しい池にでも達することが出来るのである。又しぐみのやうな貝類は、其の二枚の殻で、がんかもなどの羽毛や足に附着することがあるから、餘程隔つた處までも運ばれて、其處で繁殖することは決して珍しいことではない。

生物學上「蔘かぬ種は生えぬ」といふことがわかつたお陰で、人間の生活の上に大きな利益がもたらされた。近來發達した消毒法や食物を罐詰にして長く保存する方法なども、全く此の理を實地に應用したものである。若し病氣や腐敗のもととなる微細な生物が、種がなくても自然にわくものであつたら、かういふ方法は何の

役にもたゝないはずである。(丘淺次郎「博物簡易動物學ニ據ル」)

第五課 盤珪禪師

盤珪禪師は播磨國龍門寺の住持にして、識徳一世に高く、教を請ふ者常に門に満てり。或年佛道修行の催ありし時、來り集る者頗る多かりしが、其の會衆中、金品を失ふ者數人に及べり。然るに間もなく一僧の所爲なること明らかとなりしかば、會衆一同禪師に言ひて、直ちに之を追放せんことを請ひぬ。禪師「よし」と其の旨を聞入れしかど、更に追放のことなかりければ、數日の後、會衆は總代を以て再び此の事を言出でたり。禪師、此の度も「よし」と承諾したるのみにて、少しも彼の僧を

追ふ様子なし。かゝること尙三度四度に及びしかば、會衆大いに立腹し、若し彼の僧を追放し給はずば、我等は一人も残らず退散致すべし」と言出でぬ。其の時禪師一同に向ひて、退散したしとならば、心のまゝに退散せらるべし。御身等の如く修行を積み行正しき人々は、何處に行きても宜しかるべし。されど彼の僧は、我捨去らば誰か之を教へ導くべき。此の度の催の如きも、かゝる惡心ある者を教化せんためなれば、盜をしたればとてみだりに追ふべきにあらず。と諭しければ、會衆も大いに感じて、申出を取下げたり。彼の僧も亦此の次第を聞き、て、禪師の徳に感泣し、己が前非を悔い、一同の前に出て

て涙ながらに悪事を懺悔し、其の後道德堅固の僧となりしとぞ。

第六課 祖母の物語

我が若かりし時と今とを比ぶれば、萬づの物の移り變れる、唯夢のやうにも覺ゆるかな。紡績機織其の他何事にも機械を用ふる世となりて、家々の箴の音、絲車の音も今は殆ど聞かれずなりぬ。

昔夜なべに用ひし行燈は、ランプの明るきに比ぶべくもあらざりしを、今は其のランプさへいと稀になりて、かゝる田舎の家々まで電燈を用ふれば、げに老の目にも針の目の通さるゝ心地す。朝まだき起出でて炊事の

用意するに、マツチ無かりし昔の不便さ、先づ火打石にて火をきり出し、附木に移してたきつけたるなり。此の頃都會にては炊事に多くガスを用ふれど、電氣を用ふること、も次第に行はれゆくと聞けば、やがては便利と思ひし此のマツチも、臺所に不用のものとやならむ。洗濯にも入浴にも今はシャボンを用ふれど、昔は灰汁に洗濯物をひたし、ぬか袋にて身のあかを洗ひ落したるなり。これらは尙用ふるものもあるべし。齒を磨くにも昔はおほむね鹽を用ひ、齒磨楊枝も名の如く楊枝にて作りしものなりき。

昔の婦人にわづらはしかりしは、齒を染むることなり

けり。何れの家にもお齒黒壺ありて、身だしなみよき婦人は日毎に染直ししなり。總べて嫁入りて後は、齒を染め眉をそる習はしありて、娘と嫁との區別明らかなりき。女の髪の結ひ方、髪飾などの變れるはいふまでもなし。

學校に物學ぶ今の娘こそうらやましけれ。昔は手習師匠に通ひて、僅かばかり読み書きを學び、次ぎては裁ち縫ふ業を習ひしなり。今は學校にて、これらの業はもとより、算術・歴史・地理・理科・圖畫・唱歌、さては手藝・料理までも教へらる。女もよく學業に勤めて、智徳を磨かずば、進み行く世に伴なひ行かんこと難かるべし。

高讀女一

今は鉛筆・萬年筆にて物書くこと多し。これ等を知らざりし昔の人は、矢立を腰に差して出行き、それにて用を足ししなり。今の若き人には、矢立を知らぬ人多かるべし。

手紙をしたゝめても、其のまゝ巻きて封じ、直ちに宛名を書くこと多かりしが、今は皆封筒を用ふ。又今の如き郵便制度も無かりしかば、一々使に持たせやりしなり。遠き處へは、飛脚といふもの、一月に何回と出立ち行くに託して送りしかば、百里を隔てたる處への音信は、三十日の後にあらざれば、返事を得難かりき。切手をはりて郵便函に投入るゝ今の手輕さは、昔の人の夢にも

想はざりし所ならん。まして電信電話によりて忽ちに音信を通じ、談話をとりかはすなど、げに人智の限りなきに驚かるゝなり。

陸を走る汽車・電車、海を行く汽船、それすら老の身には唯夢の心地するに、近頃は片田舎までも自動車の通ひ、空飛ぶ飛行機さへやがては交通の機關となるべしなど聞きぬ。かくては千里比隣といふもなほおろかなるべし。

通信・交通の機關を利用して、廣く世間の事がらを知らずるは新聞紙なり。昔は唯風の便りに聞きしを、今は日毎目に見る如く知られて、家の内に在りても、遠く四方

に遊べるに同じ。

東西交通の結果、昔無かりしものの渡り來れるは、一々に數へ難し。新しき世とともに、衣食住も次第に變化し行く。都會の地には、西洋風の家作りも、洋服を着る人も、年々に増せり。毛織物は昔は少かりしが、フランネル・セル・メリンスなど、今は日常用ふる人多く、昔は四つ足とて忌みきらひし牛豚などの肉をたしなみ食ひ、牛乳の用亦盛なり。菓子ももとよりありしものの外に、近頃は色美しき西洋菓子の數々を加へぬ。

風俗の年と共に改るは自然の勢ともいふべけれど、知らず識らずおごりの風に染まり行くこそ歎かはしけ

れ。はき物の何時しか贅澤ぜいたくになれる、晴着はるかぎの木綿織物の次第に絹織物と變り行くなど、數へなば限りなかるべし。

第七課 洞庭湖

洞庭湖は支那湖南省の北部に横たはる大湖で、我が國人にも昔から其の名はよく知られてゐる。さうして有名な岳陽樓の記などによつて、我々は一望千里太平洋の如き風光を想像してゐる。なるほど大きいには違ひないが、此の湖は季節の移り變るに隨ひ、水量が著しく増減するので、水面の廣さに非常な變化を生ずる。試みに冬の洞庭湖を見ると、それは一望無邊の干潟ひがたと

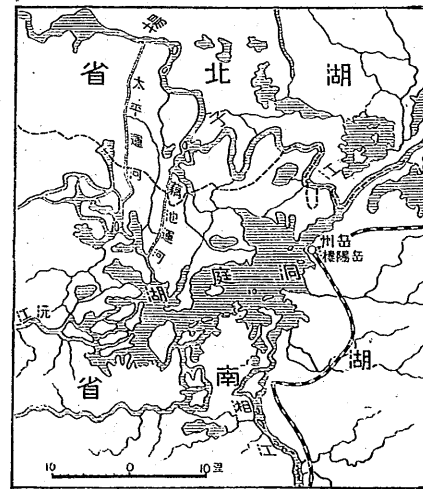
高瀬女

でもいつたらよからうか、其の間を水やせた沅江えん湘江しやう其の他の諸川が流れて、僅かに往き來の船に路を開いてゐる。處々に小さい湖程の水たまりはあるが、はてしも知らぬ漫々たる湖水は遂に見ることが出来ない。これでは洞庭湖といふよりは、むしろ洞庭原といった方が適切であるかも知れぬ。

ところで嚴冬一度去つて、揚子江水源地方の雪や氷が解け、江水がだんく増して來ると、其の水の一部は湖の北方、太平藕池等の運河を通じて南に流れ、四五月頃には、既に湖中諸川の水が兩岸を越えて廣がり、どうやら一帯が湖らしくなつて來る。更に晩春から初夏にか

けて降續く雨に、揚子江はいやが上にもみなぎり、湖南の諸川も亦増水して此の湖に注ぐので、七八月頃には、かの茫々たる洞庭原は洲も川も水たまりも悉く一面の水中に没して、ここに漫々たる大湖水を現出する。

かういふ風であるから、湖面の廣さは常に一定してゐない。水量が數尺増すと湖の水は數里の外に廣がり、數尺へると十數万里の土地が現れる。増水期中には東西



南北ともに二十五里といつてゐるが、勿論大體の數字に過ぎない。増水中でも深さは一般に淺く、諸川の水路をなしてゐる所だけがやゝ深いので、船はそれをたどつて航行する。若しだんく減水する秋の頃、過つて船を淺瀬に乘上げたら、それこそ大變である。下さうとしてゐる間に水は一刻々と減じて、船の乗上げた淺瀬は陸地となり、忽ち丘となつてしまふ。船は進退きはまつて、其のまゝ來年の増水期を待たねばならない。かういふ船を冬季水かれて後に見ると、三四十尺の高地に安閑として横たはつてゐる。

洞庭湖は、實に揚子江の水の急激な變化を緩和する一

大貯水槽である。江水が一時に増加すると、其の水の一部を此の湖が收め、充滿するに及んで、徐々に元の揚子江に吐出す。若し此の湖が無かつたら、揚子江沿岸に於て年々起る洪水は更に急激におそつて來て、一層大なる損害を與へるであらう。天然のたくみもここに至れば甚だ巧妙といふべきではないか。

第八課 契約

約束を守らねばならぬといふことは、我々がとくに教へられ、常に實行してゐるところで、我々の社會共同生活上極めて大切なことである。故に法律では之に關する規定を設けて、其の實行を強制してゐる場合がたく

さんにある。殊に約束は普通經濟上の問題に關して結ばれることが多いから、法律は主として此の關係に就いてくはしい規定をしてゐる。法律では約束のことを契約といひ、それを實行することを履行といひ、契約をする雙方の人々を契約當事者といふ。

契約に就いて其の原則を規定してゐる法律は、民法である。民法では、賣買、貸借、雇傭、請負等諸種の契約を規定してゐる。しかし契約はこれだけに限るわけではないから、民法以外の法律にも、其の他種々の契約が規定されてをり、又法律に規定が無くとも、我々は隨意な内容の契約を結ぶことが出来る。けれども法律が斯くの如

く契約の自由を許すのは、畢竟共同生活の便益の爲であるから、公の秩序、善良の風俗に反するやうな契約は、効力を認められないのみならず、公益の爲には、契約の自由が制限されることも珍しくない。大正十二年九月の關東大震災後、暴利取締令が出て、たとひ買手があつても、食料品、建築材料、其の他を不當に高く賣つてはならぬと禁止されたのは、其の一例である。

契約には多くの場合、證書が作られるが、證書は結局證據に過ぎないものであるから、證書の有無によつて履行の責任には變りがない。賣買其の他多くの契約は、當事者雙方が義務を負つてゐるいはゆる雙務契約であ

るから、契約の各當事者は、自分の方の義務を履行しない中は、相手方の義務の履行を迫ることは出来ない。又契約を履行するには、其の文言通りにしたといふだけでは不十分である。なるだけ相手方の迷惑にならぬやうに、誠實信義の精神を以て履行せねばならぬ。例へば數量の多い貨物を任意な時に引渡すといふ契約をしたにしても、相手方の家に取込のあるのもかまはず持込んだら、それは誠實信義を缺いた行爲である。此の點をよく理解して、互に相手方の利益を斟酌するやうにさへ心掛ければ、契約の締結にも無理がなく、其の履行も圓滑に行はれる。斯くして一つの契約が圓滿

に締結履行されることが積み積れば、やがて社會共同生活の圓滿をもたらす。約束を守ることは大切な道徳上の義務であり、大切な法律上の義務である。

第九課 山村

面積三方里といへば廣いやうにも聞えませうが、九分通りは山です。其の山あひを縫つて左に折れ右に曲りながら、南から北へ流れる大川に沿うて散在する花澤、石原、根尾、川邊、月野といふ五つの山間部落を一村に合はせて、川邊村と呼びます。これが私の村です。

どちらを向いても五町六町十町とは見渡しのきかぬ山懷に、家といへばやつと屋根の見えるものまでを數

の中に入れても、十軒とは一目に見ることが出来ません。唯一番戸數の多い川邊は、眞直な新道に沿うて家が四五十軒、いはば此處が一村の中心で、學校もあれば役場もあります。豆腐屋、菓子屋、酒屋、さては何でも屋の荒物屋が二三軒、ちよつと町の體裁をしてゐますので、物好きな菓子屋の主人が、入口の障子に筆太に「川邊町」と書いてから、誰言ふとなく「町」といふやうになつたと聞いてゐます。

「うぐひすは冬至から鳴くものだ」とよく祖父はいひますが、山里に春はなかく、おとづれて來ません。根尾の正林寺に梅の咲く頃も、尙時々雪が降ります。東京から

来る少女雑誌を見ますと、門松の側ではねつきをしてゐる繪などが載つてゐますが、春の遅い山里に育つ私たちには、斯うした繪はむしろ不思議に思はれます。春が遅いだけに、春がうれしうございます。谷間々々の雪が消えて、麥が日増にのびて行く頃には、土筆も出れば、れんげ草も咲きます。日が一日々々と永くなつて、女の子は摘草、男の子はたこあげに夢中になります。山の本は松杉檜のときは木、其の他は栗檜楓などで、櫻はあまりありませんが、それでも木の間がくれに咲く一本二本のゆかしい眺めがあります。春も半ばを過ぎる頃から、山村は生氣に満ちて來ます。

楓や檜の若葉が山々にもえ、蛙はおびたくしく田の面に鳴きます。田起し、種蒔と次第に忙しくなつて、男も女も馬も牛も田畑に出て働きます。夏が來て麥の刈入も済むと、やがて田植です。見渡す限り水の一ぱいはられた田に、親も子も手傳の者も、早苗を手にして一せいに植出します。喉自慢の音頭に合はせた美しい田植歌が、田から田へと流れます。

此の頃から、朝はよく草刈に出かけます。明初める頃、山裾のくさむらに、あたりの静かさを破つて、さくく、さくさくと切味のよい鎌の音が聞える。と思ふと、露をふくんだ草は片端から倒れて、其處にはちまきをした若

者か、ねえさんかぶりの少女の姿が現れます。一わたり刈取つて背負つて行く草の中には、きつと山百合の花が二三本まじつてゐます。

炎天の田の草取はずるぶん苦しいものです。胸の邊までのびた稻の中に分入つて、焼けつくやうな日光を背に浴びながら、こゝんで取るのです。風のない土用の眞晝、稻田の中はむつとする草いきれに、體中が汗びつしより、額の汗が兩眼に流れ込んで盲同様になつたところを、思はず稻葉の先で目を突く。湯のやうに熱くなつてゐる泥水の中には、いつてゐる足には、何時の間にかたくさんのひるが吸附いてゐる。——それでも夕方一

日の仕事を終つて家に歸り、行水をした後の氣持のよさは、とても都會の人たちにはわかりません。

二百十日も無事に済んで、稻の花が何時しか重さうな穂になる頃から、農家は又だんくと忙しくなります。鳴子かゝしが金色の波たつ田の面に立つて、群雀は此處から彼處、彼處から此處へと追ひやられる。早稻から順々に刈取られて、到る處に稻掛が組まれ、やがて農家の内庭に俵の山が一つ二つとふえて行きます。其の頃私たちに一番待遠しいものは、八幡様のお祭です。

秋晴の空に見上げる柿のこずゑの美しさ。てつべんにさへづるもずの鋭い聲は、狭い山里に響き渡る。山々の

紅葉が赤々と夕日にはえて、美しいと思つてゐる中に、朝夕うすら寒くなつて來て、時雨が降出します。せつかく待ちこがれたお祭にも、冷い雨にちら／＼と雪がまじつて降るやうなこともあります。

稲がすっかり刈取られて、水一滴も留めず干上つた田は、私たちにとつて其のまゝ、廣い運動場です。まり投げをしようが、縄飛をしようが、大きな聲で唱歌を歌はうが、誰一人小言をいふ者はありません。

雪が降つて一尺二尺と積れば、藁靴をはいて銀世界の田の面を走り廻る愉快さ。山村の冬も子供にとつては楽しい天地です。

第十課 書物の購入を頼む

其の後しばらく御無沙汰致居候處皆様には御變りもなく御過しなされ候や御伺ひ申上候さて祖父の病氣に就きては毎々御親切に御尋ね下され誠に有難く存候一時はずゐぶん心配致候へども御陰様にて追ひ／＼快方に向ひ近頃は氣分も餘程宜しく候まゝ、何卒御安心下されたく候御存じの通り平生は至つて達者にて何かと氣まめに立働く方として少し快くなるにつけ次第に退屈致候に付先日知合の方より本を拜借致し讀み聞

かせ候處大層喜び申候されどそれもはや大方讀終へ申候へば甚だ申しかね候へども新刊の傳記物にて何かおもしろさうなるもの二三冊御見立の上御求め下されたく金五圓小爲替にて御送り申上候尙甚だ勝手がまし候へども年寄のこととてとかく氣短に候へばなるべく早く御送り下され候やう願上候末筆ながら御兩親様に宜しく御傳へ下されたく候かしこ

五月十七日

よし子

すみ子様

第十一課 笑話

壺

そさう者壺を買ひに行き、うつむけてあるを見て、「こんな口の無い壺があるものか。」と言ひながら、ひつくりかへし、底も抜けて居る。」

數珠

向ふより來る者數珠をくびに掛け、大きな笠を着たり。うつけ者之を見つ、手を打つて感じ、「そなたが着たる笠は、殊の外大きい。何として其の數珠をくびに掛けられた。」と問ふ。いや、これは先づ數珠を掛けてから笠を着たのぢや。」と言うたれば、とかく物は聞いてみぬと。」

走り自慢

走ることを自慢にする者あり。或時盗人を追ひかけ行く。向ふより友達來り、「なんだく。」盗人を追つかけてゐる。「何處にゐる。」あ、追越してしまつた。」

第十二課 春日局

慶長九年七月、徳川秀忠の嫡男江戸城に生まる。祖父家康の幼名をとりて竹千代と名づく。此の子こそやがては徳川三代の將軍と仰がるべきものなれとて、京都所司代板倉勝重によき乳母求むべしとの命あり。此の頃文字を知り禮儀にならへる女は、京都ならでは得難かりし故なり。勝重大切なる仰事なりとてあまねく求む

れども、やさしく育ちたる京女は、關東の武威をおぢ恐れしにや、行かんといふもの一人もなし。勝重困じ果てて、栗田口に高札を立て、其の由を記して志願の者を募りぬ。世に珍しき事なりければ、忽ち傳へて近國までの評判となれり。

一日勝重の邸に來りて、我等如きものにてても苦しからずばまかり下らん。といふものあり。はるく美濃國より上りたりといふ。勝重直ちに對面したるに、威儀あり氣品ありて、世の常の女とは見えず。其の素姓を問へば、齋藤利三の女、稻葉正成の妻、福と呼ぶものなり。と答ふ。利三は齋藤實盛の末孫にて、武名ありし人、正成も亦か

つて小早川秀秋に仕へて、世に知られたるものなりけり。勝重喜びて其の由江戸に注進したるに、やがて召出

されて竹千代の乳母に抱へられ、後春日局と稱す。

竹千代は幼き時より強情我慢の行多く、萬づ荒荒しき事のみ好みしかば、春日之を見て、よき方に導かばあつばれ古今の名將たるべしとて、養



育に丹誠をこめければ、よき乳母なりとて歎稱せぬものなく、將軍夫妻も心を安んじて、教養を其の手に一任したり。

竹千代三歳の時、弟の國松生まれしが、成長するに随ひ、竹千代の猛きに引きかへて、心様やさしかりしかば、母の寵愛一方ならず、後には秀忠も竹千代をうとんじて國松をのみいつくしみ、折々は之を世嗣にせんとする氣色をさへ見するに至れり。勢に附くは世の習にて、國松の方には諸大名多く出入して、兄の威勢は日に月に薄らぐばかりなり。春日の心痛はたとへんに物なし。長幼の序をみだるは、私人の家にありてすらみだりに爲

すべきことに非ず。ましてこれは將軍家なり。若しさる事もあらば、自然天下の大事にも立至るべし。如何にもして竹千代君に將軍家の後を嗣がせまらせばやと、神佛に祈願をこめて、益思を教養に勞しけり。

竹千代十二歳の時なり、幼心にも弟の國松のみ時めくを見ては、世にありがひなしとや思ひけん、一日人無き折をうかゞひて、自害せんと企てたり。春日之を知りて、切に其の輕舉を諫め、もはや猶豫すべきに非ずとて、伊勢參宮と稱して江戸を立ち、駿府に隱居せる家康の許に行きて、斯くと訴へたり。家康聞きて大いに驚きしが、よく言ひなぐさめて江戸へかへし、次いで自ら江戸城

に到れり。

此の日將軍夫妻は竹千代、國松を伴ひて出迎へたるに、家康は國松には目もかけず、竹千代に向ひて、竹殿、しばらく會はぬ間に大人しうぞなりたる。これへ、これへ。とて、手をととりて奥に入り、國松ははるかの末座にすゑさせ、土産物などにも著しく差を立てて與へたり。さて竹千代には人に長たる者の心得を説き、國松にはゆくゆく諸大名と共に兄に仕ふべき身ぞと諭しければ、竹千代世嗣のこと自ら明らかになりぬ。

竹千代家光と名乗り、將軍となるに及びて、春日を重んずること厚く、大奥の事は擧げて之に任せたりしが、春

日は少しも高ぶることなく、よく其の任を盡くしたり。寛永二十年の秋病にかゝりしが、其の篤きに及びても、更に藥を用ひんとはせざりき。これさきに家光疱瘡にかゝりて命危かりし時、身之に代らんとて、一生醫藥を用ひじと神明に誓ひたることのありければなり。家光聞きて、親しく其の邸に臨みて、手づから藥を與へたるに、おしいたゞきて口には入れたれども、遂に一滴も吞下さず。斯くて享年六十五にして歿せり。家光其の死を悲しみて、七日間精進したりといふ。東京本郷の麟祥院といふは春日の建立したる寺にして、春日の墓は其の境内に在り。

第十三課 眞の知己

一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難い。平素歡樂を共にする間は、肩を打ち手を執つて互に談笑するが、一旦利害相反すれば忽ち仇敵となるやうな者は眞の知己ではない。眞の知己は死生の境に臨んでも、相信じて疑はないものでなければならぬ。昔イタリアのシシリ島に、ピチアスといふ男があつた。或罪によつて國王の前に引出されて、死刑を言渡された。ピチアスは今生の思出に、老父母の顔が見たくてたまらない。死刑執行の日には必ず歸つて來るから、此の世の名残に今一度父母に會はせてもらひたいと歎

願に及んだ。王は一言の下にはねつけた。
ピチアスの無二の親友にダモンといふ若者があつた。
王に向つて、

「私はピチアスの親友でございます。彼は決して二言致すやうな者ではございません。どうか特別の御仁愛を以て、彼の願をお聞入れ下さるやうお願い申します。其の代りに私を獄中に入れて、萬一期日に至つて彼が歸つて参りませんやうなことがございましたならば、私をおしおき下さいませ。」
と言つた。王は此の友情に感じて、其の願意を聞届けて、ダモンを獄屋に入れた。

約束の日限は迫つたが、ピチアスは歸らない。王は獄卒に命じて嚴しく獄門を固めて、ダモンの動靜に一層の注意を拂はせた。しかもダモンは平然として、少しも不安の色を示さない。彼は言つた。

「若し期日に至つてピチアスが歸らないとしても、決して彼の本心から出たのではない。何か不慮の故障が起つたのである。」

いよく約束の期日になつた。約束の時間が迫つた。けれどもピチアスは歸らない。影も形も見えない。ダモンも今は是までと、死ぬ覺悟をきめた。しかし彼の親友に對する信用は更に變らない。彼は又言つた。

「今此處で殺されるのは、最も信愛する友人の爲である。少しもうらむことはない。」

獄卒はダモンを刑場に引出した。彼の一命は寸刻の間に迫った。此の時早く彼の時遅く、ピチアスは息も絶え絶えになつてかけこんで來た。彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。若し期日に後れるやうなことがあつては、一つには無二の親友を殺し、二つには二言を吐いた惡名を後の世に傳へると思へば、居ても立つてもゐられない氣がしたが、如何とも仕方がなかつた。船が陸に着くや否や、ひた走りに走つて刑場にかけて見れば、ダモンはまだ生きてゐたので、餘りのうれし

さに目前の死も何も忘れて、手の舞ひ足のふむ所を知らなかつた。

王は二人の信義と愛情に感激して、ピチアスの罪を許した。

「若し自分にもこんな親友を持つことが出来るなら、王者の富貴も榮華もいらない。」

とは、王の心の奥から出た歎聲であつた。

第十四課 廢物の利用

一家の中には、これは不用だ。といつて捨てられる物も、ずるぶん有るものである。殊に絲くづ紙くづ反故などは、塵と一しよに掃捨てるのが普通であるが、こんな物

でもそれ／＼利用の道があるから、たゞ捨ててしまふのはもつたいないことである。

絲くづといへば、多くは拔絲などである。拔絲はそれで再び衣類を縫ふことは出来ないにしても、しつけ絲や、雑巾をさす絲ぐらゐにはなる。紙くづは形狀大小によつて、いろ／＼用ひ所のあるものであるから、決してみだりに捨ててはならない。例へば細長い日本紙のくづならば、集めて置いてはたきに作ることも出来るし、又紙よりにして置いても、後日何かの役に立つ。帳面をとぢるのに、むぎ／＼新しい紙を引裂いて紙よりを作るのは、決して心掛のよい人のすることではない。又少し

大きな反故は、物をはつたり、澁紙を作つたりするにも入用のものであるから、なるべく保存して置くがよい。西洋紙でも新聞などの紙は、包紙や袋として重寶であり、又疊の下に敷けば、のみを防ぐに最も妙である。

一つぐらゐでは役にたゝぬやうな物でも、集めて置くといろ／＼の用をなす物が多い。マツチのあき箱などは、どんな家でも知らず／＼の中にたまるものであるが、これはいろ／＼の種物などを入れてしまつて置くに甚だ重寶である。又これでおもちやの簞笥や家などを作つてやると、子供は非常に喜ぶ。古はがきなどもずゐぶんだまるものであるが、これもいろ／＼利用の道

があらう。一時これで土瓶敷や夏の敷物などを作ることははやつた。新聞雜誌の重要記事を切抜いて古はがきにはつて置くと、カード式の切抜帳が出来る。

古着のきれなどは使ひ途が非常に多いから、誰も大切に保存して置く。唯帶の古いものは割合に利用の途が少いが、上等の品であれば、掛物・額面等の表装に用ひられ、普通の品であれば、座蒲團などに作るとよい。

シャボンの使ひへらしたものは、とかく折れたり崩れたりして廢るものであるが、これもぬか袋のやうなものに入れると、最後まで使用することが出来る。茶の出しからは疊をふくによく、兎の飼料となり、又乾かして

置いて枕に入れると甚だ結構である。

近頃は家庭に於ける廢物利用が昔程重んじられなくなつたやうである。古きを捨て新しきを追ふ今日は、各人が廢物を重んじなくなつたのも、或は自然の勢であらう。しかし斯くの如きは決して喜ぶべきことではなく、むしろ歎ずべく戒むべきことである。或人がかつてドイツに留學してゐた時、破れた靴下をごみたために捨てた。すると下宿してゐた家の主婦が、誰がこんなものもないことをしたので、と言つて拾ひ取つたので、「こんな物が何になりますか。」と尋ねると、解いて賣るので、蠟燭の心になりますから。」と言つたといふ。一體ド

イツには勤儉の美風が國內にあまねく、殊に女子はよく注意して廢物の利用を工夫する。以て他山の石とすべきではないか。

既に用をなした古い物だからと言つてみだりに捨てるのは、物に對する愛情の薄いことを證明するものである。一足の古下駄でも、長い間はいてゐたことを思へば、捨てるに忍びないものである。此の心を以て廢物の利用をいろく工夫してみるがよい。廢物の利用は單に經濟上のみの問題でなく、物を愛するといふ美しい心を養ふ上からいつても大切なことである。

第十五課 海の朝

一 潮の音遠し、明行く海。

なほ夜の名残にさ霧はこめて、
はひよる浦波砂を洗ふ。

船歌かすか夢に似たり。

二 紫にほふ東の空。

横雲忽ち眞紅に燃えて、
見るく太陽波を離る。

神代のまゝの光たふと。

三 金龍をどり、きらめく沖。

早くも島々夢よりさめて、
群れ立つかもめは風に白し。

命は溢る、海の朝。

第十六課 臺所の整理

其の家の臺所を見れば、一家の家政がよく整つてゐるかどうかがわかるものです。西洋の家庭では、臺所を見たいと望めば、外國人にでもすぐ見せてくれるさうですが、餘程よく整頓してゐなければ、こんな事は容易に出来るものではありません。

臺所をよく整理するに第一に必要な事は、其の構造と設備をよくすることです。既に出来上つてゐる家でも、少し工夫して手を加へれば、いくらかでも改良することが出来ます。構造の上で先づ何よりも注意しなければ

ならないのは、採光と通風をよくすることです。臺所は人の生命の本となる食物を調理する處ですから、何處よりも衛生的でなければなりません。それには日光が十分にはいり、風もよく通つて、何時もからりとしてゐることが肝要です。次には水の使用を便利にして、常に清潔を保つこと、棚や戸棚などの造方を工夫して、十分掃除も出来れば、目も届くやうにしなければなりません。

けれども構造や設備ばかりがよくとも、其の中に置いてある器具や材料の整頓が出来てゐなければ、何にもなりません。それには平常よく使用の順序を考へて、物

の置場所を定め、又中身の見えない物には、いれ物に一名を記して、一目で物がわかるやうにするなど、いろいろの注意がいります。又一度使つたものは、用が済み次第必ず元の處に納めて置く習慣を守ること、整理の上には大切なことです。暗やみの中でも直に物が探し出される程に整つてをれば、臺所の仕事は常に手早く行はれます。

しかし臺所の整理といふことは、唯よく整つてをればそれでよいといふものではありません。此の整頓によつて物や勞力や時間をむだに費さないやうにし、一家の經濟を豊にすると同時に、生活の安定と充實とを計

らなければなりません。さうするには、何よりも此處に働く人の心掛が肝心です。一つの料理をするにしても、初から必要な分量を考へ、それに要する時間を計つてかゝれば、出来上つた物にもむだがなく、後れてまごついたり、早過ぎてまた手数をかけるなどのめんどうもないわけです。ひいては他の仕事も順序よく運び、體にも餘裕が出来ます。風呂を沸かすにしても、むやみに火をたき、沸かし過ぎてまた水を入れるやうでは、物や勞力や時間の浪費がどれだけか知れません。

臺所の整理は、主婦たるものの心掛の如何によるのです。さうして臺所の整頓如何は、やがて一家の家事の整

頼の基となるのですから、其の家にとつては非常に大切な事といはなければなりません。

第十七課 マチソン夫人

アメリカ合衆國の大統領ジームス、マチソンの夫人は、世に聞えた賢夫人である。夫マチソンは結婚後數年にして國務卿となつたが、生來言葉少く且極めて剛直であつたから、他から尊敬こそされるが、悦服される徳には乏しかつた。之に反して、夫人は如何にも温和な愛敬のある人で、さうして思ひやりの深い交際家だつたので、ちやうど夫の短所を補つて、大いに其の事業を助けた。マチソンが時の大統領ジェファーソンを助けて衆望を



集めたのも、夫人の助に負ふところが多く、マチソンの反對黨の人ですらも、一度夫人に接すると、忽ち其の反抗の鋒が折れてしまつたといはれてゐる。

マチソンは斯くの如き良妻の内助を得て、遂に前後二回大統領に選舉せられた。滿八年の在職中、外には英國との戦争があり、内には黨派の争があつて、其の勞苦困難は一通りでなかつたが、幸に夫人の慰藉と助勢によつて、其の難局に處することが出来た。

マチソンは任滿ちて後、郷里バージニヤのモントピリヤーといふ處に退いて、高齢の母と共に住んでゐた。或時人が此の母堂を尋ねて、御退屈ではございませんかと問ふと、老人はほゝゑんで、私は幸に目が丈夫なので、まだ編物や讀書が出来ますから、少しも退屈致しません。ぬ。それによめがよく私をなぐさめ、誠に優しく介抱してくれますので、今ではこれを母のやうに思つてをります。といつて、傍にゐる夫人を指さした。見ると、かつてはなやかな生活をしてゐた人とも思はれない程質素な風をして、優しく老人を世話してゐる態度は、さながら慈母が愛兒に對すると變りがなく、老人が母と呼ぶ

のももつともだと思はれた。又或人が夫人を評して、マチソン夫人は交際の巧な快活な圓滿な人として世に響いてゐるが、私はそれよりも、一主婦として能く其の家政を治め、能く其の姑に仕へるあつばれな良妻として見る方が、はるかに貴いと思ふ。といったのは、よく夫人の平常を語るものである。されば夫マチソンも晩年しばく人に語つて、妻との結婚は自分の一生を幸福にした。と言つた。

第十八課 かげぐち

税所敦子刀自は、よく物のわかつたお方で、文學趣味にも富まれ、小さい事は餘り氣にかけない、ごく落着いた

人でした。

私は刀自と御一しよに宮中の御用をしてをりましたが、或時刀自よりも地位の低い人が、學者かは知らないけれど、ほんたうに氣がきかなくてしやうがない。其のくせ平氣で私たちを追使ふ」と、刀自の惡口を申すのを聞きました。私は、かねてから一方ならず敬愛してゐるお方のことををしられたので、我が事のやうにくやく、何とか言返してやらうかと思ひましたが、刀自が次の部屋に居られるのに遠慮して、ことさらに話題を他に轉じました。

やがて刀自のお部屋に行つて、

「ほんたうにお心持が悪うございましたでせう。」

と申しますと、

「何ですか。」

と言つて、何も氣がつかれなかつた風で、しきりに書き物をしてをられます。私はやつきとなつて、

「次の間であなたのかげぐちを申してをつたではございませんか。」

と申しますと、

「さうですか。少しも聞えませんでした。それであなたは心配して下さつたのですか。有難うございます。」

とお禮をおつしやつたきり、外には何も申されません。

「ほんたうにくらしい。お聞きにならないわけはありません、あんな大きな聲で、聞えよがしに言つてゐたのでございますもの。」

「いや、それには聞えないわけがございます。私は若い時に夫に別れ、それから姑に仕へ、子供の世話をして一生を終らうと思つてをりましたのに、島津公のたつてのお言葉で、若君のお附になりました。ところが其の若君がおなくなりになつたので、御殿から引下らうと思つてをりますと、今度は姫君にお附きして、近衛家へ行けとおつしやつて、どうしてもお許がありませんで、やむを得ず其處の老女となりました。」

此の二回の御奉公中、他の方々は、典禮にもくはしく、御用にも慣れてゐられて、機敏に器用に働かれますが、私は體も弱く、慣れてもゐないので、思ふやうに働けもせず、お役にも立ちませんでした。随つて人様からいろいろ、非難されました。それを聞くと、とかく氣が沈んでいけません。そこで私は、人のかげぐちを聞かないけいこをしようと思ひ立ちました。初は其の度毎に南無阿彌陀佛を唱へましたが、其の中に、何とも言はないでも、自分で聞かうと思はないことは聞えなくなりました。」

「かし人は自ら省みるために、少しは他人の惡口も

聞いておく方がよくはございませんか。」

「なに、他人の悪口を言ふやうな人の言葉を用ひたつて、何の役にたつものですか。ほんたうにいけない場合には、誰かが来て、『お前はあゝいふ風にするからいけない。斯ういふやうにするがよい。』と忠告してくれます。其の時に、自分の悪いことを反省して直せばよい。若し自分が悪くなければ、唯其の好意だけを謝しておけばよいのです。悪口を聞けば何となく心が濁つて、かへつていけません。これは人の中に居る心得です。あなた方もやつて御覽なさい。」と申されました。

此のお話をうかゞつて、私もなるほど思ひました。自分がほんたうに悪ければ、人が忠告をしてくれます。かげぐちを氣にするぐらゐつまらないことはありません。先方がおもしろ半分に自分をそしつてゐるのに、それを本氣にして心を苦しめるのは、誠にばかげたことです。そこで私も、かげぐちは氣にかけまい、聞かないやうにしようと思つていろ／＼つとめましたが、刀自ほどの信仰が無いためか、とかく私の耳には聞えて困ります。しかしお陰で、聞いても餘り氣にかけないことだけは學び得たやうに思ひます。(婦人文化講演集所載下田歌子ノ談ニ據ル)

第十九課 南洋の珍果

午前の中に日本領事館をおとづれて、何かと用事を済ました。

ホテルの晝食にはまだ大分間がある。此のひまに少しバタビヤの町を見物して、歸路南洋の珍果マンゴスチーンを買ひたいと言へば、案内者のジンは委細承知と馭者臺に飛上つた。

馬車は快く南國の陽光の下を走る。さすがにジャワは美しい處だ。綠濃き熱帶植物の木立の間に、白壁の洋館が涼しげに見える。

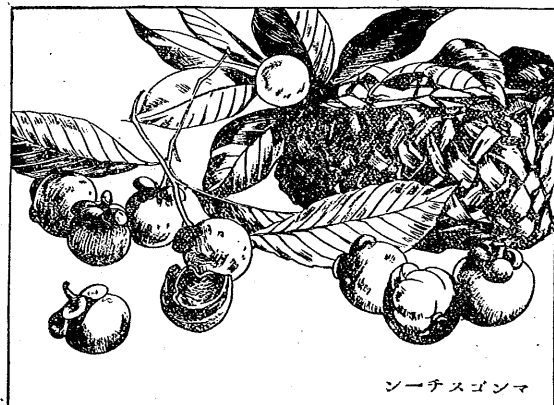
コーニングス、プレーンといふ廣々とした芝原を一周

し、木立物古りたるウィルム小路を抜けると、眼界は再び開けて、ウォーターロー、プレーンといふ公園に出る。中央には高さ五六丈もあらうと見える白色の圓柱の上に、大きな獅子像が立つてゐる。ジャワの政廳は此の公園の東にある。

馬車は北に走つて、支那人町を通り抜け、古風な城門のほとりに着く。此處が果物市場である。ジンが馬車から飛下りて、いろ／＼商人と交渉して、幾籠かの果物を買集める。自分も側からあれもこれもと手を出す。

ホテルへ歸ると、食事にはまだ三十分程あるので、早速マンゴスチーンの征伐にかゝつた。大きさは蜜柑ぐら

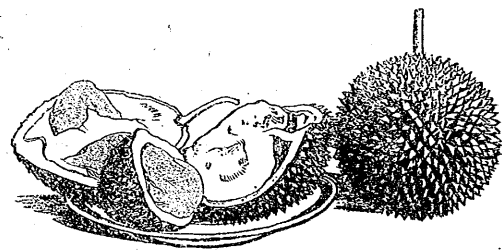
る。黒みがちの紫色をした厚い殻を、ナイフで切廻して、すぼつと二つに開くと、純白な美しい肉が現れる。之をフォークの先でそつと引上げると、蜜柑のふさのやうに抱合つた六個の白肉が、其のまゝそつくり出て来る。之を舌に載せると、あたかも春の淡雪のやうにすぐ解け去つて、唯芳香のみが残るやうに感じられる。味は林檎に似て、しかも非常に甘く、舌ざはりはさながらアイスクリ



ームのやうである。思ふにマンゴスチーンは、造化が其の巧を凝らして、萬果の粹を此の一果に集めたものであらう。しかし此の實は、枝を離れて一週間たゝぬ間に、早くも白肉が褐色に變じて、くづれてしまふ。かつて英國の汽船會社が、船長等に賞を懸けて、一籠のマンゴスチーンをビクトリヤ女帝の食膳に奉らうとしたが、遂に誰一人成功しなかつたといふ。近頃冷蔵庫に入れて遠地に送るが、やはり香味を失つてしまふ。罐詰にしては、到底香味の萬分の一をも保たないといふことである。

晝食後部屋に歸つてしばらく休んでゐると、何とも言

はれぬ悪臭が鼻をついて来る。何だらうと考へて見てもわからない。すると廊下の方で、ちりとナイフの音がする。戸をあけて見ると、ジョンがドリヤンの實を割つてゐる。少し離れて、土人のボーイがほしさうな顔をして立つてゐる。マンゴスチーンを果物の女王とすれば、ドリヤンは果物の悪魔である。腐つた卵のやうな悪臭、とげのあるにくくしい外皮、それでゐて其の特殊な味は、食ひなれた人を非常に誘惑する。大きさは



ン ヤ リ ド

高讀女一

子供の頭ぐらゐる、暗黄色を帯びた外皮は木の皮のやうに堅く、之に太いとげが密生してゐる。高さ數十尺の樹上に生じ、往々通行人に落ちかゝつて大けがをさせることがある。しかも木からもぎ取つては未熟であり、落ちてゐるのを拾つては腐敗のおそれがあるから、土人は終日終夜樹下に居て、實の落ちて来るのを待つてゐるといふ話である。

今ジョンが割つたドリヤンの實を見ると、其の中に不規則な幾つものかたまりがあつて、其の一つくがどろどろとして黄色いクリームのやうである。其の濃厚な味は、マンゴスチーンの淡泊上品と全く正反對である。

が、食ひなれると、其の悪臭などは少しも氣にならぬのみか、かへつてマンガスチーン以上に好むやうになるといふ。ドリヤンの出盛頃になると、土人は之をむさぼり食はんがため、往々家業を捨てて顧みないといふことである。(稿見祐輔南洋遊記ニ據ル)

第二十課 綱引

ヨーロッパからの歸り途、船中退屈の餘りに、或日綱引をしようといふ話が出た。日本郵船會社の船で外國人の乗客が少かつたから、組を作るのに、一方は日本人、一方は外國人ときめた。もつとも外國人といつても、過半は英國人である。僕は少し氣分が悪かつたため御免かう

むつて、やじうま兼行司の役目を勤めた。

いよく始める前に、兩方十五人づつと數はきまつたが、何分外國人は體も大きいし、目方もずつと重いから、到底勝負にはなるまいと懸念したが、勝敗は何れにしても、たい運動が目的だから、やかましいことはいはずに、雙方同數で開戦した。すると外國人の方では、日本人は體が小さいから、一しやうけんめいになるに及ばないと思つて、少しばかりにした氣味があつたか、第一回の勝利は日本人に歸した。無論我々は大いに得意になつて、聲を張上げて萬歳を叫んだ。次に二回目の勝負を始めると、今度は外國人も油斷しないで引張つたと見え

て、勝利は彼等のものとなつた。第三回はいよく決戦である。日本人は大和民族の榮辱此處にありと、力の有らん限り引張ると、外國人も遊戯とはいへ勝負事だから、大奮發して引張つた。僕は其の間に立つて氣が氣でなく、東に走り西にはせて、兩方の形勢をうかづつてをつたところが、あら嬉しや、勝利は遂に我が同胞に歸した。喜の餘り我々は飛上るやら手をたゞくやらして、満足の意を表した。相手方は一時茫然として、どうしてあんな小さい日本人に負けたらうといふやうな顔をして考へてをつたが、其の中に一人が發議して、日本人は小さいが強い。大いに敬意を表さう。といふと、皆の者が

さうだくと拍手喝采して、敵方の勝利をほめたゝへた。之を見之を聞いた僕は、同胞の勝利をさも自慢げにをどりはねて喜んだのが、今更恥づかしくなつた。(新渡戸稻造歸雁の蘆ニ據ル)

第二十一課 嫁げる姉の許へ

日にそへて暑さきびしうなりまさり候處皆様御障もあらせられず候や伺上候こなたは一同打揃ひ無事に暮し居候まゝ、何卒御安心なし下されたく候さて此の間の御手紙によれば來月初には文子さんをお連れになり御いでなさるとの事に一同大喜にて今より御

待ち申上げ居候文子さんも此の春よりあんな
よが出来候由母上も早く見たしと毎日申居
られ候私も學校のひまに一つ身の單衣を縫
ひ居候これを着せたらばいかにかはゆらし
からんと一入待遠しき思ひのせられ候何卒
一日も早く御いで下されたくそれのみ樂し
みに致居候かしこ

七月十八日

たか子

姉上様

御許に

なほく例の輕便鐵道も電氣鐵道に變

高讀女一

高讀女一

り去る六月一日より役場の側まで延長
致候御到着の折には母上と二人にて停
留場まで御迎に參るべく候

第二十二課 漁船歸る

焼けつくやうな夕日は、さへぎるものもない白い砂を
眞赤に染めてゐる。風のないだ海の波は、小山のやうに
寄せて來ては、だぶりとけだるい音に崩れると、ざ、ざ、ざ、
ざと布を敷いたやうに廣がる。と、其の波先がきら／＼
と日に輝いては、すぐさつと引いて行く。

「船がはいるよう。」

人影一つない廣い濱の何處からか、急にかん高い子供

の聲が起る。

「おい。」

「今行くよう。」

あつちでもこつちでも聲に應じて、其處の松の間、此處の岩の陰から、男女、年寄り、子供、漁村の人の群がぞろぞろと出て来る。今まで眠つたやうに静かであつた濱は、急ににぎやかになり、活動が始つて来る。高い砂山の上に立つて、小手をかざしながら沖を見てゐた一人が、

「眞先が明神下の船だ。」

と大きな聲で叫ぶと、

「うん、うちの船か。」

高讀女一

と、其の家族らしい四五人が勢よく砂山にかけ上る。朱を流したやうに夕焼に染まつた沖の方からは、黒い帆影がぼつとり小さく、一つ二つと歸つて来る。

「あゝ、また見えた。今度は太兵衛どんのうちのだ。」

と誰かがまた叫ぶ。

湧くく。沖の波の間から、小さい船が一つ又一つ、後から後から視界にはいつて来る。濱に立つてゐる人々は、皆言合はせたやうに我が家の船を見守る。子供たちはもうはしやぎきつて、緩く打ちつける波先を追つては逃げ、逃げては又追ふ。

船は幾艘も續いて、ないだ海に夕日を受けた帆が美し

く並ぶ。かもめが三四羽、其の先導をするやうに低く飛んで岸近く來ると、一せいに水の上に翼を休める。

「大れふだぞ。あの帆柱を見る。」

群集の中の誰かが叫ぶ。次第に近寄つて來る船の帆綱には、幾つもの編笠が飾のやうにつるされてゐる。一つ百尾の目安として、どの船にも五つ六つ無いのはない。櫓を漕ぐ掛聲がかすかに波を渡つて來る。

濱には益、人數が増して、右往左往に入亂れる。籠を持つてゐるもの、棒をかついでゐるもの、飛廻る子供、それを追ふ犬、嬉しさに張切つた空氣があたりにみなぎる。やつさ、ほいさ、やつさ、ほいさ、十挺櫓の勇ましい掛聲は

次第に近づいて、高波を乗越えく、見る間に一艘二艘と寄つて來る。岸から三四十間の處まで來たと思ふと、ぐるりと船が廻る。仁王のやうにたくましい姿が艦に現れて、

「綱を投げるぞ。」

と大きな聲で叫ぶ。聲と共に太い綱が勢よく陸の方へ投げられる。船からも陸からも若い男たちが赤銅のやうな體を海中にをどらせて、水に漂うてゐる綱を陸にかつぎ上げる。えつさ、えつさ、えつさ、えつさ、船を押す、綱を引く、拍子を合はせて一直線に陸に向ふ。船は舳先を波にゆられながら、高い艦を小山のやうに陸に向けて

すわる。

船から勇ましい掛聲と共に、次から次と獲物が運ばれて、白い砂の上に投出される。瑠璃のやうにすんだ目、紫を含んだ青色の背、勢よく張つた尾、鰭、見るく、鯉の山が築かれる。此の時、此の華やかな夕日の下に、多大の勞苦に報いられた海幸を圍んで起る喜の聲は、波を渡り山にこだまして、遠くく、何處までも響いて行く。

第二十三課 かぶと蟲

まだ小學校に通つてゐた頃、昆蟲を集めることが友達仲間ではやつた。自分も古蚊帳のきれて蟲捕網を作つて、土用の日盛にも恐れず、毎日のやうに蟲捕に出かけ

た。蝶や蛾や甲蟲類のたくさんすんでゐる城山の中をあちこちと歩いて、永い日を暮した。二の丸、三の丸の草原には、珍しい蝶やばつたが多い。少し茂みにはいると、木の幹に玉蟲、こがね蟲、米つき蟲などさまぐの甲蟲がゐる。草木の強い香にむせながら、胸ををどらせて、こんな蟲をねらつて歩いた。捕つて來た蟲は熱湯や樟腦で殺して、菓子折の標、本箱にきれいに並べる。さうして此の箱の數の増すのが楽しみであつた。蟲捕から歸つて來ると、體は汗で水を浴びたやう、顔は火のやうであつた。どうしてあんなに蟲好きであつたらうと、母は今でも昔話の一つにしてゐる。年をとるに

つけておもしろい事にもいろ／＼出會つたが、あの頃
珍しい蟲を見つけて捕らへた時のやうな喜は餘りな
い。今でも、城山の奥の茂みの中に漂つてゐた朽木の香
を思ひ出すことがある。

何時か城山の裾のお堀に臨んだ暗い茂みにはいつた
ら、大きな木があつて、桃色がかつた花がこずゑを一面
におほつてゐた。散つた花は風に吹かれて、みぎはに半
ば沈んでゐる船に美しくちらばつてゐた。此の木の幹
には處々蟲の食入つた穴があつて、穴の口には細かい
木くづが蟲の糞と共にこぼれかゝつて、一種の臭氣を
放つてゐた。見ると幹の高い處に、見事なかぶと蟲が、い

かめしい角を立ててとまつてゐる。自分の標本箱には
まだかぶと蟲のよいのが一つも無かつたので、嬉し
さに胸をと／＼ろかしながらねらひ寄つた。少し網が届き
かねたが、やう／＼のことで捕れたので、急いで腰の蟲
籠に入れ、包みきれぬ喜をいだいて森を出た。

三の丸の石段の下まで來ると、向ふから美しいか
りがさをさした女の人が、子供の手を引いて、木陰傳ひ
に來るのに會つた。かさを持った手に藥瓶をさげ、片手
は子供の手を引いてゐる。子供は大きな新しい麥藁帽
子のひもをかはゆいあごに掛けて、眞白な洋服のやう
なものを着てゐた。自分のさげてゐた蟲籠を見つける

と、母親の手を離れてのぞきに來たが、目を圓くして母親の方へかけて行つて、袖をぐいぐいひつばつてゐると思ふと、又蟲籠をのぞきに來た。母親は早くおいでと呼ぶけれども、なかく自分の側を離れない。強ひて連れて行かうとすると、道の眞中にしやがんでしまつて、とう／＼泣出した。母親は途方にくれて叱つてゐる。此の様子を見てゐた自分は、俄に蟲籠のふたをあけてかぶと蟲を引出し、道端の相撲草を一本抜いて、蟲の角をしつかりしばつた。さうして、さあといつて子供に渡した。子供は直に泣止んで、きまりの悪いやうな嬉しいやうな顔をする。母親は驚いて子供を叱りながらも禮

を言つた。自分はだまつて空になつた蟲籠を打振りながらかけ出したが、嬉しいやうな、惜しいやうな、かつて感じたことのない心持がした。

其の後度々同じ木の下へも行つたが、あの時のやうな見事なかぶと蟲はもう見つからなかつた。又あの時の親子にも再び會はなかつた。(寺田寅彦、藪柑子集、二樓)

第二十四課 スバルタ武士

昔ギリシヤにスバルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽今尙高し。而してスバルタ人の教育の方法と生活の狀態とを聞くものは、此の聲譽の偶然にあらざるを知るべし。

スパルタ人は悉く武士にして、男子生まれて七歳に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子王族といへども家庭に人と成るを許されず。其の教育は身體の鍊磨と士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操・武術・劍舞・軍樂等にして、讀み書きの如きは餘力を以て之を學ぶに過ぎず。

教育所に於ける少年青年の生活は、専ら廉潔實素克己、忍耐の氣象を鍛鍊するを目的とし、其の規律は頗る嚴格なるものなりき。寝ぬる時は、僅かに一枚の敷蒲團を用ふるのみ。其の蒲團は河邊の蒲の穂を集めて、自ら之を作らざるべからず。衣服は重ね着を許さず。冬も尙は

だしにて、靴をうがつを得ず。毎日河水に浴して、溫湯を用ふることなく、食物も亦極めて粗惡にして、しかも飽食することを許されず。是他日戰場に出でて、飢渴に耐ふるの習性を養はんがためなり。

言語は簡明を貴び、饒舌を戒む。故に今日に於ても、西洋諸國にては、言語の簡單明白なるを、スパルタ人の答といへり。又謙讓と從順とはスパルタ武士の最も重んずる所にして、長幼の序正しく、未成年者は路を行くにも、兩手をマシトの下に入れ、視線を地上に垂るゝを禮とし、揚々濶歩するを得ず。公民は總べて未成年者を懲戒するの權利を有し、懲戒を受けたる未成年者、若し之を

其の父兄に告ぐる時は、父兄は更に之を懲戒するの義務あり。二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出て、公民の列に入る。しかも武藝の練習は終生之を怠るを得ず。公式祭儀の席には、老若相合して武勇の歌をうたふ。老人先づ聲を上げて、我等はかつて武勇なる壯者なりき。とうたへば、壯年之に次ぎて、我等こそ今はそれなれ。知らぬ者はいざ試みよ。とうたふ。少年また之に和して、我等はやがて更に武勇なる壯者たるべし。」と



高説女一

高説女一

結ぶ。

斯くの如き尙武教育に鍛はれたるスバルタ武士は、死を見ることが歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つるを以て無上の名譽とせり。

こゝにスバルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。

敵の軍勢山野に満ち、大小の軍旗空をおほひて天日見えずとの報に接し、大將自若として曰く、然らば其の陰に戦はん。」

敵勢雲霞の如く、其の數を知らずと言へば、一將喜んで

曰く、「敵勢大なれば、我等の名譽も亦随つて大なり。」一將又曰く、「我等は敵軍の數を知るの要なし。唯其の所在を知るべきのみ。」

敵軍將に寄せ來らんとすと報ずるものあり。將軍叱して曰く、「敵、我に寄するに非ず。我、敵に寄するなり。」

スバルタ人の忠勇義烈なるは、獨り男子のみに非ず、女子も亦此の美德を分てり。一婦人其の子の出陣に際し、自ら盾を取りて之に授けて曰く、「勝ちて持歸れ。然らずんば之に乗りて歸れ。」

或時の戰に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり、來りて之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てり

高讀女一
高讀女一

と聞きて、喜んで曰く、「我が子は祖國の爲に之を産めり。」又或時の戰に、討死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭に集り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍におちいりたる將卒の母は、固く戸を閉ぢて出でず、ひそかに其の子の武運つたなくして、祖國の爲に死する能はざるを悲しめり。

第二十五課 統計

一家に就きて見るときは、男女の數甚だしく異なるものあり。或は全く男子又は女子のみの家なきにあらず。然るに一村に就きて調査するときは、一家に於けるが如く男女の割合に甚だしき差異なし。なほ其の區域を

廣むるときは、一郡は一村より、一縣は一郡より、差異次第に減少し、斯くて全國に就きて見れば、更に僅少となる。例へば大正九年十月一日施行せられたる第一回國勢調査の結果によれば、我が國內地の總人口は五千五百九十六萬餘、中男子二千八百四萬、女子二千七百九十二萬にして、男子百人に對して女子九十九人六分に當る。

男女の割合斯くの如くなるは、此の時の調査のみに限らず、從來の人口統計に就きて見るも、常に相似たる結果を示し、其の割合は略一定せり。又年々の出生死亡婚姻・自殺等も、大數に就きて觀察するときは、それゝ其

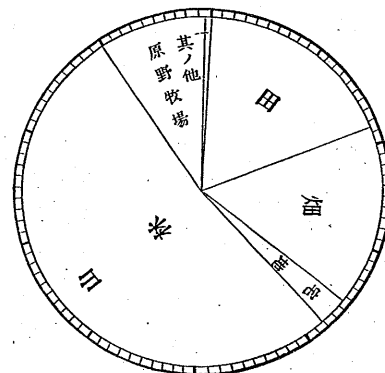
高讀女一
高讀女一

の人口に對する割合は殆ど一定し、郵便物の配達不能の割合すら、年々相似たりといふ。されば社會の現象は一見甚だ不規則なるが如しといへども、大數に就きて之を觀察するときは、自ら整然たるものあり。

年次	人口百ニ ツキ出生	出生女百 ニツキ男	出生百 中死産	人口百ニ ツキ死亡	人口千ニ ツキ婚姻	人口一萬 ニツキ自殺
大正四年	三・三	一〇四	七・三	二・〇	八・二	一・九
同五年	三・三	一〇四	七・二	二・二	七・九	一・七
同六年	三・二	一〇四	七・二	二・一	八・〇	一・七
同七年	三・二	一〇四	七・四	二・七	九・〇	一・八
同八年	三・二	一〇五	七・〇	二・三	八・五	一・八
同九年	三・六	一〇五	六・六	二・五	九・八	一・九

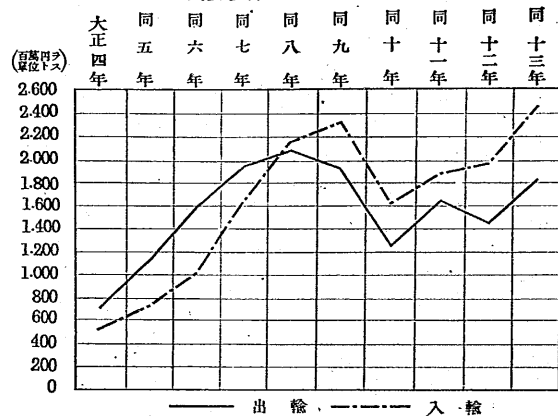
斯く同一種類に屬する事物又は現象の大數に就きて調査し、數字を以て表したるものを統計といふ。統計は場合によりては、見る者をして其の印象を深からしめんが爲、面積線・色、或

民有地租地目別割合
大正十三年

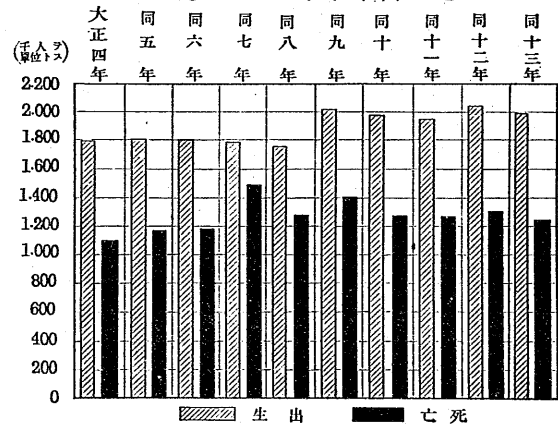


同 十 年	三・五	一〇五	六・五	二・三	九・一	二・〇
大正十一年	三・四	一〇四	六・三	二・二	八・九	二・〇
同 十二 年	三・五	一〇四	六・一	二・三	八・八	二・〇
同 十三 年	三・四	一〇四	五・九	二・一	八・七	一・九

最近十年間本邦外國貿易額



最近十年間本邦出生及死亡



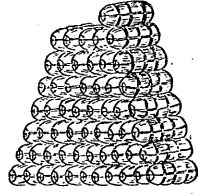
大正三年米收穫高



臺灣百六萬石



朝鮮三千三百萬石

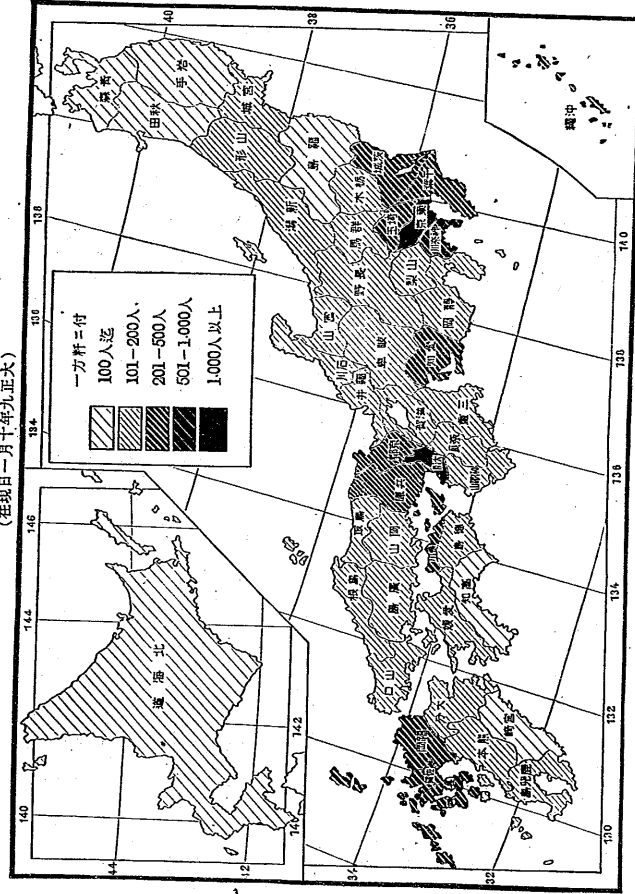


内地五千七百萬石

(百一萬石一俵割)

は形象等を用ひたる圖表を以て之を表すことあり。統計によりて觀察するとき、社會各般の狀態を明らかにし、隨つて其の原因結果の關係をも審にするを得べし。即ち犯罪・自殺等の統計によりては、其の國民の道德程度等を知るべく、農工の生産額、貿易の多寡によりては、其の國の經濟狀態等をうかふ

人口ノ密度
(大正九年十月一日現在)



(ノリノ粗密ハ色ニ依テ淡ク濃クセルモノナリ)

べく、又歳入・歳出及び軍事の統計を見ては、財政・國防の如何を察するを得べし。されば統計は、政治・經濟及び社會上の施設・經營には勿論、自然現象又は社會現象の學術的研究にも亦必要缺くべからざるものなり。これ文明諸國に於て特殊の機關を設け、多額の費用を投じて其の調査を怠らざる所以にして、我が國に於ても、内閣に統計局ありて、各種の重要な統計を取り、各省・府・縣自治團體・銀行・會社等、亦それ〴〵其の必要な事項に就きて統計を整ふることに務む。

第二十六課 後流し

紀伊山脈の間を縫つて流れ下る十津川と北山川の沿

岸は、有名な木材產地である。随つて此の二川の合した熊野川の川口にある新宮の町には、りつばな製材所もあれば、木材を運ぶ船もたくさんに着いてゐる。製材所の貯木場や川口の附近に行つて見ると、何萬とも數知れない木材が、果もなくぎつしりと水面に浮かんでをり、川上からは大きな筏が後から〴〵下つて来る。其の有様は實に壯觀である。

斯うたくさん木材が集つてゐるところだけを見ると、わけもなく此處まで運ばれたもののやうに思はれるが、何しろ二十里三十里の山奥で伐つて運んで來るのであるから、決して容易な業ではない。

先づ某の山で幾百本かの立木を伐倒す。さうして木の大ききや種類によつては、其のまゝ直に出すものもあるが、多くは五六箇月から一年ぐらゐも乾かして後、山出しにかゝる。

伐出した場所が谷近い處なら、其のまゝ押落すが、谷へ遠い處では、木材を數本縦に並べて、其の上を順次にすべらせて送り出す。

やつと谷へ木材を落しても、多くは木を流す程の水の無いのが常であるから、今度は此の谷をせき止めて、氣長に水をためる。其の中に水が次第に増して堰を溢れるやうになると、木材を一本々々流し落す。勿論行く手

にも水が乏しければ、幾度でも之を繰返す。若し又全く谷に水が無いとなると、別の方法をとらねばならぬ。それにはたくさんの細い木を二尺おきぐらゐに横に並べて、其の上をそりのやうなものに載せて運ぶのである。

さて漸く大川へ出たとなると、管流しといつて、其の木材を一本々々のまゝで川へ流す。これが流に随つて幾里か流れ下つて、あばに着く。あばといふのは、川を横切つて鐵線を張渡して置き、上流から流れ下る木材を受止める處で、此處で始めて筏に組む。

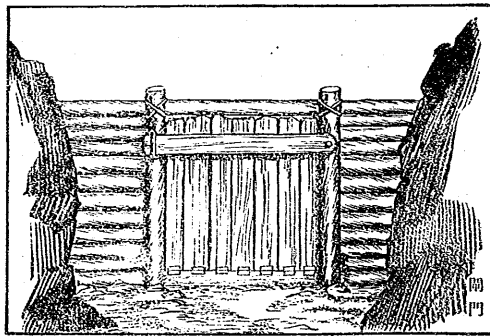
筏の組みやうは、先づ尺締方一尺、長さ二間の體積四本を標準（標準）として一



組とし、此の一組の木材を幾つもつないだものが一筏になる。いはば一筏は一列車、各組の木材は一輛々々の車に當るのである。筏には大小あるが、先づ八組又は十一組づつなぐのが普通である。

一筏には通常二人乗つてゐる。一人は前の方で舵をとりながら櫂を使ひ、一人は後に居て竿を執つて筏を操る。若し水が少

い時であると、川の途中に閘門のついた堰を作つてあるから、此の門を閉ぢて水をたゝへた後、さつと門を開くと、筏は瀧のやうに流れ落ちる水につれて、矢よりも早く下つて行く。斯うしてだんく川下になるに随つて、水量は次第に多くなり、流は漸く緩くなる。筏師が此の間の變化極りない景色を縫つて下る様は、如何にも愉快さうに見えるが、雨露にさらされ、水にひたり、日がな一日水を見つめて、ちよつとの油断も出来ない身になつては、容



易な苦勞ではない。有名な熊野川の勝地瀨八丁も九里峽も、全く其の眼中には入らないのである。

第二十七課 瀧澤馬琴の苦心

瀧澤馬琴は徳川時代に於ける有名なる小説家にして、其の著作二百六十餘種、雜著を合すれば、無慮三百數十種に及ぶ。それ等の中にも南總里見八犬傳の如きは、其の構想の大なる、其の分量の多き、我が國古來多く比を見ざる大作にして、卷數總べて百六卷、彼が四十八歳より七十五歳に至る二十八年間の努力の結晶なり。随つて馬琴が此の八犬傳を完成するに就きては、涙こぼるゝばかりの苦心こそ傳へらるれ。

元來馬琴は非常の勉強家にして、壯年時代には、早朝より夜の十時に至るまで稿本を綴り、就寢後は更に讀書に夜を更して、時には曉に及ぶこともありき。此の過度の勉強の結果、何時しか健康を害して、八犬傳に筆を執初めし頃は、既に齒抜落ち、逆上口痛のわづらひさへ起れりといふ。されど謹直にして義理を重んずること堅き彼は、一旦書肆と約せし稿本をなほざりにする時は、出版の時日後れて、利を失はしむること少からずとて、一方に攝生に注意しつゝ、もなほ専心其の著述に勉めぬ。

とかくする中、馬琴が六十七歳の秋、右眼俄に明を失し

ぬ。彼は今更に過去の不注意を悔みつゝも、例の負けじ魂より、以後は左眼のみを頼みとして、なほも屈せず著作の筆を進めたり。然るに幾何もあらずして、また左眼も何となくかすむやうなりしかば、或は眼鏡の玉の悪しき故にもやと、水晶製の價高きものをもいとはず買求めて試みしかど、眼疾は益度を加ふるのみ。斯かる間にも、小説の稿は一日も廢することなく、七十四歳の春までは、ともかくも從來のまゝに一枚十一行の細字を書列ねるたりしが、此の頃より更に病重りて、到底細書するを得ず。遂には五行とし四行としたれど、其の大字すらも手探りにて記せば、墨の續かぬところさへある

に至りぬ。馬琴が其の日記中に、衰眼實にせんかたなし。と歎じ、衰眼かすみて見えかね、唯手加減のみなり。といへるも此の頃にして、彼が心中の遺憾如何ばかりなりけん。されど秋より冬に入りては、其の探り書きすらもかなはずなりて、さながら雲霧の中に在るが如く、わづかに東西を辨じ、晝夜を知るを得るのみ。

斯かる境遇に至れば、多くは失望落膽して、年來の事業をも廢するが常なれど、彼はなほも志を屈せず、如何にしても其の大作を完成して、一は讀者の期待にこたへ、一は書肆の利をも全うせしめんことを期したり。されど當時一子興繼は既に歿し、孫は幼くして斯かる助と

なるべくもあらず。唯嫁みち幸に多少の文字を解したれば、之をして口授を筆記せしむることとしたれど、當時の女子の學問といふは極めて淺きが常なれば、漢字雅言はもとより、假名遣句讀をも知らず。之を相手として、一字一句の末までも教へ導く馬琴の苦心は如何ばかりなりけん。教ふる者、くちをしの目やと歎けば、まして教へらるゝ者は夢中をたどる心地して、困じ果てては唯泣くのみなりき。馬琴は其のいたはしさを見るにつけ、幾度か中止を思ひ立ちしかど、一卷二巻と進む程に、みちも漸くに馴れて、苦心初の如くならず、言を費せども舌の疲るゝまでには至らず。かくして最後の十卷

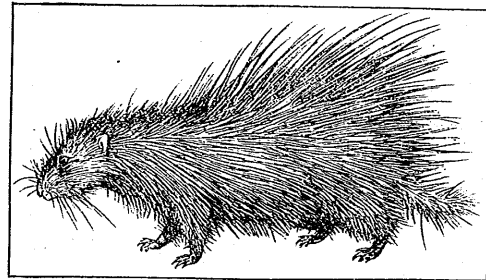
を綴り、馬琴七十五歳の秋八月、終に八犬傳はこゝに完成するに至りぬ。馬琴が不屈の精神の偉なるはもとよりなれども、みちがよく之を助けたる功も亦没すべからず。馬琴が其の書の末に記せる文中に、教を受くる者の困じながらも倦まで勉むるにあらざれば、此の十卷を綴り果して、局を結ぶに至らんや。といへるも、宜なるかな。

第二十八課 やまあらし

世の中にはずるぶんおもしろい動物がある。やまあらしなども其の一つであらう。此の獸は種類によつて多少の差があるが、大體身長二尺ぐらゐで、胴から尾にか

けて長い鋭い針毛で包まれてゐる。

やまあらしは木の根や木の實や草などを食物としてゐる。常に穴の中にすんでゐるが、其の形の恐しいのに似ず、性質が誠におとなしく且臆病であるから、腹がすいて食物を捜す時でも、容易に外に出ない。先づ穴の入口の處に身をひそめて、暫く外の様子をうかがひ、何の危険もないことを確めてから始めて出る。又針毛といふ武器は持つてゐるが、自ら進んで他を攻撃することはない。唯他から攻撃されて自



高讀女一
高讀女一

分の身が危くなると、それを逆立てて、まるで針のまりのやうになる。さうするとどんな猛獸でも攻撃するこゝとが出来ない。象などが近寄ると、すぐ針毛を立てて、死んだもののやうにじつと動かずにゐる。象は不思議な物があると思つて、暫く立止つて見てゐるが、針毛があるのでどうすることも出来ずに、其のまゝ行つてしまふ。

それではやまあらしには敵が無いかといふと、全く無いことはない。それはアフリカにゐる或種類の強い蟻である。この蟻の群に會つては、どんな猛獸もかなはない。やまあらしが例の手段で、如何に針のまりのやうに

なつてころげ廻つても、蟻は平氣で全身にとりついて、忽ちの間に食殺してしまふ。又やまあらしの敵には熊がある。熊は極めて利口であるから、自分の身を傷つせずに相手を攻撃する方法を知つてゐる。先づやまあらしを見ると、近寄つて石や土くれを打ちつける。するとやまあらしは針毛を立てて、まりのやうに圓くなる。此の時、熊はそつと側に寄つて、前脚の爪で幾度もくくやまあらしをころがして、木の根や幹に打ちつける。さうするとやまあらしは次第に氣力が衰へて死んでしまふ。しかし又こんな滑稽な事もある。木の上に眠つてゐるやまあらしを捕らうとして、そつと登つてゆり動か

したり、相手の乗つてゐる枝を折つたりする。ところが熊は木登は上手だが、木を下りることは案外下手であるから、熊が地上に下りつく前に、やまあらしはすばやく他の木に登つて、平氣でまた眠つてしまふ。

やまあらしは北アメリカ南部ヨーロッパ北部アフリカ・南洋諸島・支那の東南部等にある。英領カナダなどでは、保護獸になつてゐて、みだりに之を捕る者は罰金に處せられる。此の獸は斯ういふ風に、處によつては法律で保護されてゐる上に、他の猛獸に攻撃される恐も少く、又餌も到る處にあるから、勝手氣まゝに野山を歩いて、腹がいっぱいになると、穴の中や木の上で靜かに眠る。

やまあらしは形に似ず、どこまでものんきなかはゆい
獸である。

第二十九課 足柄山

足柄山のよはの月、空すみ渡る笙の音に、
草木も耳をそばだてて、谷の眞清水響き合ふ。

新羅三郎義光は 更に祕曲を吹添へて、
取出したる一卷を 時秋が手に渡しつゝ、

「汝が父より傳はりし 祕曲は之にをさめたり。
今の調を耳にしめ、都路として歸れとく。」

さすが名残の惜しまれて、時秋尙も御後に
従ふべし。」とためらへど、義光頭をうち振りて、

「我戦場に向ふ身の 野末の露と消えん時、
汝にあらては此の曲を 誰かは後に傳ふべき。」

我は武の爲、家の爲、汝は世の爲、道の爲、
つゝがなかれ。」と西東、露けき袖を分ちけり。

第三十課 故郷

人一度故郷を離るれば、故郷の風物は常に其の心中に

往來す。嬉しき時にも故郷を思ひ、悲しき時にも亦故郷を思ふ。久しく異境に在りて故郷に歸れば、山川草木悉く歡んで我を迎ふるの感あり。殊に業成り名遂げて之を故郷の父老に告ぐるは、人生の至樂なり。故に古來志を立つる者、錦を着て故郷に歸るを希はざる者なし。故郷の慕はしきは、必ずしも山水の美なるが爲に非ず。又風土の住みよきが爲にも非ず。嚴寒不毛の北極の地に住める人も、百花咲滿つ南方溫暖の地に來りて、尙其の故郷を忘るゝこと能はずといふに非ずや。故郷の慕はしきは、祖先墳墓の地にして、我が幼時嬉戲せし處なればなり。祖先幾代此處に生活し、永く此處に眠れるを

思へば、心無き山河も自ら情あり。我が嬉戲せし幼時の樂しき記憶を想ひ起せば、木石亦知友の感なくんば非ず。況や父母兄弟姉妹親族故舊の我を待つあるに於てをや。

故郷は我が出生の地を中心とすれども、其の範圍一定ならず。一郡より見れば、村は即ち故郷なり。一縣より見れば、郡は即ち故郷なり。全國より見れば、縣は即ち故郷なり。世界より見れば、國は即ち故郷なり。故に故郷を愛する心は即ち國を愛する心なり。

故郷を愛する心は、故郷を遠ざかるに隨ひて益深きを加ふるものにして、我が領土を出でて遠く他國に在る

時、其の最も強烈なるを覺ゆべし。彼の三笠山の歌を誦する者、誰か萬里異域の客として故郷の空を慕ひし仲麻呂の感慨を察せざらんや。

然れども今は昔と異なりて、通信交通の機關發達し、數十日にして世界を一周すべく、十數時間にして極遠の地にも音信を通ずべし。又世界各國は殆ど我が友邦ならざるはなく、到る處保護を受くるを以て、旅行するも事業を經營するも安全なり。されば各國民互に海外の發展を競ふ今日、徒に故郷に戀々として國內に小利を爭ふは、故郷を愛する所以に非ず、又國を愛する所以に非ず。強固なる目的と確實なる手段とを有する者は、盛

に海外に雄飛して、國運の發展に貢獻すべし。骨を埋むる豈た墳墓の地のみならんや。人間到る處青山あり。

高等小學讀本 女子用卷一終

大正十五年 二月 五日 印
大正十五年 二月 十日 發行
大正十五年 二月 十一日 翻刻印刷
大正十五年 二月 廿五日 翻刻發行

高等小學讀本卷一(女子用)

臨時定價金拾五錢

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地 16
日本書籍株式會社

代表者 大倉保五郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地
日本書籍株式會社工場

大正十五年二月十七日
文部省檢査濟

發 賣 所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所